

「わたしはある」「エマオへの道」

「わたしはある。わたしはあるという者だ」出エジプト記 3:14

モーセが神様の名を問うた時、神様は「わたしはある。わたしはあるという者だ」とお答えになった。この一言だけで、聖書ってすごい本だと思う。これは、本気で読まないといけないと身が引き締まる。神様が「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われたのである。「ある」というほど重要なことはない。あるかないか、それがすべてだ。

神様がない、いない、おらないと思うと、まず頭の中がこんがらがって、何が何だか分からなくなる。何が善いことで、何が悪いか、何を求めて、どのように生きればいいのか、さっぱり分からなくなって、薄暗がりの中に放り出されたような気がする。想像するだけでぞっとする。大変だ、神様がなくて人間だけの世の中。それがどんなに大変か！こう書きながら、思わず頷いてしまった。その大変さは想像するまでもない、この現実を見れば良い。毎日の新聞を読めば良い。文明が進めば進むほど増す人類の苦悩。一人一人の内にある恐れや不安、イラ立ち、虚しさ。神がいないから、全て人間が解決しなければならない。でも、何をやっても人間には限界があるから、どうしようもなくなると、助けてくれるはずの神（偶像）を造って拝むか、絶望して死ぬか。

こんな世に、神様は救い主を与えてくださった。救い主イエス。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」と言って、言葉どおり病気で苦しむ人をいやし、罪に泣く人をゆるし、道端でうず

くまる人に目を留め、そっと立たせてくださったイエス。出会う一人ひとりに愛の限りを尽くし、教え、導き、その後「十字架につけろ、十字架につけろ」と群衆の叫びの中で、人を罪から救うためにその命さえ捨てられたイエス。

人はみな、このイエス様に出会うために生きているのだ。

「わたしはある」と言われる神様が、神を「ない」として滅び行く人間に、「わたしはあるのだ」と告げるため、「わたしはあなたを愛しているのだ」と告げるため、送ってくださったイエス様。このお方に出会うために私たちは今日も生かされている。

東京で開催された「無教会全国集会」の帰り道、新幹線の中で聖書のどこか一箇所をくり返し読もうと決めた。どこでも良かったのだが、その時はなぜか「エマオへの道」が思われて、ルカ福音書24章13節～35節を読んでは黙想し、黙想しては読み、2時間近くくり返した。他の本も持っていないわけではなかったが、その時私のうちに静かなる決意のようなものがあり、聖書を素読して、その記事の中でイエス様と出会えるか、実験してみようと思ったのだ。というのは、「伝道と家庭集会」という分科会でみんなと話し合ううち、「集会に来た人に聖書の講話をしてもなかなか解ってもらえない」という悩みを話される方あり、「イザヤ書のように難しいものをどのようにして学んだのか」と問われる方あり、一方「聖書は学者や専門家のために書かれたものじゃない。ごく普通の人が読めるものだ。聖書の言葉に聞くのだから」と言われる方あり。また「主題講演」で「聖書の言葉こそイエスと出会うためのコンタクトポイント、イエスの霊的実在を感じるための場所である」と言われたのが印象的で、もし私がこの拙い「福音」を書き続けようとするなら、そこしかない、聖書の言葉で出

会ったイエス様を書くしかないと分かったからだ。

新幹線の中、注解書も聖書講話も、読み比べる数々の聖書もない。あるのは新共同訳聖書だけ。

「ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。」ルカ 24:13～14

まず、「ちょうどこの日」とあるが、すぐ前の記事を少し読めば、イエス様が十字架で死なれて三日目。六十スタディオンというのは、聖書についている付録の換算表からすれば約 11 キロ。エマオも、付録の聖書地図を見ればエルサレムとの位置関係もだいたいわかる。聖書って、ちゃんと付録まで付けてくれて、親切だなあと思う。「この一切の出来事」とは、19 節～24 節に詳しく書かれているが、次になんと

「話し合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。」24:15

とある。ずっと以前テレビで、独立学園の紹介番組だったろうか、司会者が「聖書は誰が読んでもわかりますか」と問うたとき、鈴木弼美氏が「はい、キョシタンカイな心で読めば誰にでもわかります」と答えたのがとても心に残っていた。キョシタンカイって、心を虚しくして淡々と読んでいけばいいんだって独り合点していたが、今辞典を調べてみると「虚心坦懐」とは「先入観を持たず、広く平らかな心」とある。なるほど、聖書の言葉は先入観を持たず、素直な広やかな心で読むとわかるのだ。新幹線の中で、私の心が虚心坦懐であったかどうかは知らないが、「話し合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいて

来て、一緒に歩き始められた」という言葉に聴き入っていると、イエス様が近づいて来て、二人と一緒に歩いておられるのが目に浮かぶようだった。

「しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった」 24:16
これだ、これがいい。人は何でも直ぐに分かりたい。でも、本当に分かるために、分からない時が必要なのだ。

「イエスは、『歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか』と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。」 24:17

このイエス様のお言葉を思っていると、胸が熱くなってくる。イエス様って何というお方だろう。決して一方的にご自身を宣言されるのではなく、近づいて来て「その話は何のことですか」と問われ、暗い顔をした二人の話にまず耳を傾けられた。語るより先に、耳を傾けて聞こうとされるイエス様を思っていると、♪いつくしみ深き友なるイエスは♪と、なつかしい思いがこみ上げてくる。

エマオへの道は後半が圧巻！それは来月に。